

English Garden 第85話

"Life, what is it but a dream?"

Lewis Carroll

「人生とは、夢でなければ何であろう」

ルイス・キャロル

『鏡の国のアリス』("Through the Looking-Glass")から、結びの詩の最終行です。

「ふしぎの国」も「鏡の国」も、すべてアリスの夢の世界であり、人生というのもまたすべて夢である、というキャロルのメッセージと受け取れます。

夢については、アリスが鏡の国で出会う双子の兄弟トウィードルディとトウィードルダムとの会話に おもしろいものがありますので、まずご紹介しましょう。この双子の兄弟は、マザー・グースに出てくる人物です。

アリスは森から出る道を教えてほしいとこの兄弟に頼むのですが、二人は知らん顔をして「セイウチと大工がカキを食べた」というナンセンスの歌を延々と聞かせます。そのうちに蒸気機関車が煙を吐くような音が聞こえてきました。アリスはトラカライオンでもいるのかと怖がりですが、それは王様のいびきなのでした。トウィードルディは、「いま王様はアリスの夢をみているが、もし目覚めたらおまえはどこにいることになるか」とアリスに尋ねます。以下はそれからのアリスとトウィードルディの会話です。



"Where I am now, of course," said Alice.

"Not you!" Tweedledee retorted contemptuously.

"You'd be nowhere. Why, you're only a sort of thing in his dream!"

「もちろん、いまいるところにいるわ」とアリスはいいました。

「いいや、ちがうね」トウィードルディはばかにしたようにいい返しました。「あんたはどこにもいないんだよ。あんたなんか、王様の夢の中にいるだけなんだから」

さらにトウィードルダムにも「自分が本物でないことくらい知ってるだろう」と追い討ちをかけられ、アリスは「私は本物よ！」と叫んでとうとう泣き出してしまいます。でも、何ともばかばかしい議論に思えたので、気をとり直して先へ進むことにしました。

ここにも「私は誰」という問いかけがあり、夢とは何か、実体とは何かという人間の存在にかかわる問題が提起されています。キャロルは豊かな創造力と言葉の魔術を駆使して、物語の随所で一見ナンセンスのようでありながら 意味の深い理論を展開しているのです。アリスの物語はむしろ大人のための物語とっていいのかもしれない。

さて、表題の結びの詩にもどりましょう。

「ふしぎの国」の序詞では、輝くばかりの夏の午後、楽しいボート遊びの最中に、にぎやかにお話をねだる子どもたちの姿がうたわわっています。それから6年後の「鏡の国」の序詞では すでに夏も過ぎ、成長した子どもたちに対する一抹の淋しさをこめて語りかけていますが、この物語が終わったいまはすでに秋も深まり、子どもたちとの宴も終わって思い出もうすれ、幻のようにその姿が浮かんでくるだけです。淋しくうつろな気持ちにとらわれる作者のたどりついた心境は、「子どもたちはいま夢の中で眠っている。人生とはすべて夢にすぎない」ということだったのでしょか。時のはかなさ、人の世の悲しさというものが、特に『鏡の国のアリス』に強く表われているように思われます。

なお、この原詩の各行の頭字をとると "ALICE PLEASANCE LIDDELE" となり、キャロルがこよなく愛した 学寮長リデル先生の娘アリスのフルネームとなります。

(次回に続く)